言語表現からみたサオ族のものやことのとらえ方について
――サオ族長老のサオ語調査を通して――

The unique view of the Thao language

新居田　純野
Sumino Niida

長崎外国語大学
Nagasaki University of Foreign Studies

Abstract: Thao is the language of the native Thao people residing in Taiwan's central region, a language that belongs to the Austronesian family of languages. In 2001 the Thao people were officially recognized by the Taiwanese government as the 'tenth aborigine' in Taiwan. Their traditional language is considered endangered. The Thao language has some linguistic expressions based on its unique view, like other languages. This paper examines the unique view of Thao people through example sentences from the research.

Key words: Thao language, deictic expressions, existential and possesive expressions, potential expressions

1．はじめに

台湾中部の日月潭周辺に住むサオ族は2001年に台湾の行政院によって公式に認知された「第10番目の原住民」である。サオ族の人口は現在人口約776人[1]であり、その言語、サオ語はオーストロネシア語族に属する文字をもたない言語である。また、現在では、日常生活に使用する言語は主に台湾語と中国語であり、サオ語を日常的に話せる人は高齢者に限られている。その中でも言語調査に耐えうる人は10人にも満たない状況[2]にあるサオ語は消滅の危機に瀕した言語である。

しかし、このような状況の中で日常生活ではほとんど使われることのなくなったサオ語であるが、長老Kilash氏[3]は妻であるIshul氏[4]と台湾語とともにサオ語を使って日常的に会話をしていた数少ないサオ語話者であった。Kilash氏は90代という高齢である上に、いくつかの病気を患ってはいたが、どんな時にも様々なサオ族やサオ語の調査に協力を惜しまない人であった。

そのほかにサオ語がつかわれる場面は、ここ何年かは一年に一度のサオ族の正月にシェン

シェンマと呼ばれる巫女たちが儀式としてサオ語の歌を歌い、サオ語で先祖を奉るために決まったセリフを使うことぐらいしかない状況である。このようなサオ語を守るために尽くしてきたKilash氏のサオ語に対する思いは強く、小学校で子どもたちにサオ語を教えたり、村の集会でサオ語教室を開いてその講師になったりして、サオ語保存のための様々な活動を行ってきた。しかし、それらの活動も高齢になるにしたがって身体的にも厳しくなり、亡くなられるまでの10年ほどは、たまに来るサオ語調査者のインフォーマントとして協力をするぐらいになっていた。

筆者は、2002年に台湾の中部彰化縣にある大学へ日本語教員として赴任して以来、亡くなられる前まで約15年間Kilash氏のところに通い、サオ語の調査[5]を続けてきた。サオ語の調査は、Kilash氏が日本語を話せたおかげで、日本語を媒介語としてサオ語を発話してもらうという調査方法であったが、そのことで、日本語とサオ語の対照を通して、サオ族のものやことのとらえ方が反映されたサオ語の特徴となる言語表現というものに触れられたといえるだろう。そこで、ここではサオ語を調査することで得たサオ語のある意味での言語観に迫ってみたいと思う。

ところで、それぞれの言語には、それぞれの特有なものやことのみ方やとらえ方を背景とした言語表現がある。つまり、ものやことを知覚することで、そのものやことを理解し、言語表現へとつながるのであり、ものやことのとらえ方はそれぞれの言語表現に反映しているともいえるだろう。

たとえば、サオ語の調査において、架空の人物に関する発話では、「その人は今ここにいるのか、いつ来るのか、名前は何か」などの質問が必ずあって、具体的な条件の提示後に発話がなされた。

このことから、サオ語では現場性と同時にものやことを知覚し、実際の経験として話者に取り込まれた上で発話につながっているといえるだろう。そこで、本稿では、主にサオ語文法の言語調査時に得た多数の用例を実例として、ものやことのとらえ方について考察をしていきたいと思う。

２．現場性、目の前性

調査時に「彼は畑に行く」という日本語をサオ語で発話してもらおうとした時のことである。まず「誰が行くのか」「今、その人は目の前を歩いているのか」「何をしに畑に行くのか」などといった具体的な情報を確認しないとなかなか被調査者の発話につながらない。そこで、被調査者の知っている具体的な人物の名前（以下の用例ではAbish）をあげ、「畑に行って耕すために、今Abishはあなたの目の前を歩いて畑に向かっている」というように具体的な状況を示

すと、躊躇なく発話が出てくるのである。

(1) Thuini Abish　　mu-buhat.
今　アビッシュ　MV-畑
今、アビッシュは畑に行く。

このようにそのできごとは抽象的なことではなく、話者間に共通な認識があることでなければならない。そこで、その後の調査では「彼、彼女」などの代名詞は用いず、具体的な人物名を挙げての聞き取り調査をするようにした。

また、場所をさし示す指示詞の使い分けにもサオ語の特徴がある。場所をさし示す指示詞は基本的には「ここ」がi-nay、「そこ」がi-say、「あそこ」がi-suy、かなり遠くにある場所であればi-tusiと、それぞれの範囲を分担して受け持っている。これらの使い分けは、遠近の違いに加えて、さらにその指示物が見えるか見えないかも重要な情報となる。

たとえば、「あなたの家はどこですか」という質問に対し、被調査者はその家が近くにあるのか遠くにあるのか、見えるのか見えないのかなどを確認してからの発話となる。

(2) Nak　a　taun　i-nay.
1sG　Lig　家　Loc-ここ
私の家はここだ。(目の前にある家をさして)

(3) Nak　a　taun　i-say.
1sG　Lig　家　Loc-そこ
私の家はそこだ。(家は離れているが見える)

(4) Nak　a　taun　i-suy.
1sG　Lig　家　Loc-そこ
私の家はあそこだ。(家は離れていて見えない)

(5) Nak　a　taun　i-tusi　Taipak.
1sG　Lig　家　Loc-あそこ　台北
私の家は遠い台北にある。

また次の (6) (7) の用例は「子供が今ここに話者と一緒にいるかどうか」によって使い分けられている。

(6) M-ihu a azazak i-suy nak a taun.
2sG Lig 子供 Loc-あそこ 2sG Lig 家
あなたの子供は私の家にいる。(話し手も聞き手も子供が見えない)

(7) M-ihu a azazak i-nay nak a taun.
2sG Lig 子供 Loc-ここ 2sG Lig 家
あなたの子供は私の家にいる。(話し手は子供を見ながら)

(6) (7) はどちらも、聞き手の子供が話し手の家にいることを、話し手が聞き手にしらせている。しかし、(6) の場合は、話し手が外に出かけたところで聞き手と会い、聞き手の子供が話し手の家にいることを告げている。これは両者とも外にいて、聞き手の子供の姿はみえない。(7) の場合は、話し手は家にいて、たとえば聞き手から電話がかかってきた場合の答えである。つまり、話し手は聞き手の子供とともに話し手の家の中にいるのである。

次の (8) と (9) の用例は、「日本人が今ここにいるのかいないのか」また、「話者自身とどのような関わりを持つ日本人なのか」が話者の関心事となった表現である。

(8) Lipún a thaw i-nay thuini.
日本 Lig 人 Loc-ここにいる 今
今日本人はここにいる。
(日本人が今ここいるという事実だけを表わしている)

(9) Shi-nay Lipún a thaw m-usha-iza.
Pst-ここ 日本 Lig 人 AF-行く-alr
日本人がここにいた。
(日本人は一度来たが、今はここにいない、あるいは、話し手は会っていない場合)

このようにサオ語では現場性というものを重視し、ものやことを知覚し実際の経験として話者に取り込まれたうえで発話されるということがわかる。

3．実現／非実現、完了／未完了

サオ語では、今現在を基準としてものごとが実現したのか、していないのか、またはその動作が完了しているのか、していないのかという点に関心をもって表現される。

非実現接辞の a- は動詞の前におかれて「そのものごとがまだ実現していない」「その動作

がまだ完了していない」ことを表わし、完了接辞の-in-[6]は「そのものごとがすでに実現した」「その動作がすでに完了した」ことを表わす。

次の（10）と（11）の用例を比較してみると、i-nayに非実現を表わすa-がついている（10）は「すでにここにいるが、まだこれからもいる」、つまり、「まだここに七日間滞在することが完了してない」ことを表わし、i-nayに完了を表わす-in-がついている（11）は「もう七日間の滞在が完了した」ことを表わしている。

（10）A-i-nay　　yaku　pitu wa　qali.
　　Irr-Loc-ここ　1sN　七　Lig　日
　　私はこれから七日間ここにいる。（今ここにいて、滞在の初めのほうで言う時）
（11）Pitu wa　qali yaku　in-i-nay.
　　七　Lig　日　1sN　Prf-Loc-ここ
　　七日間泊まった。
　　（「どのくらい泊まりましたか」の返事で、その七日間はもう終わっている）

次の用例は非実現のa-が「まだ食べることが実現していない」ことを表わし、完了接辞の-in-が「食べることが実現した」ことを表わす。

（12）Yaku　a-ma-kan　　afu.
　　1sN　Irr-AF-食べる　ご飯
　　私はこれからご飯を食べる。
（13）Yaku　kan-in　　afu.
　　1sN　食べる-Prf　ご飯
　　私はご飯を食べた。

このように「動作がすでに完了しているのか、あるいは完了していないのか」、あるいは「ものごとが実現したのか、実現していないのか」に発話の視点がおかれる。

４．存在するのか、所有されるのか

用例（14）（15）（16）は所有、用例（17）（18）（19）は存在となるが、サオ語では「存在」も「所有」も所有動詞yanan（持っている）によって表わされる。

（所有）

(14) Huya wa thaw yanan ma-ra’in a taun.
その Lig 人 yanan Sta-大きな Lig 家
その人は大きな家を持っている。

(15) Yaku yanan Lipún a patash-an.
1sN yanan 日本 Lig 読む-LF
私は日本の本を持っている。

(16) Yaku yanan sa azazak.
1sN yanan sa 子供
私は子供がいる。

（存在）

(17) Zintun yanan rusaw.
日月潭 yanan 魚
日月潭に魚がいる。

(18) Hudun yanan wazish.
山 yanan 猪
山に猪がいる。

(19) Palanan yanan lhuzush.
かご yanan すもも
かごにすももがある。

次の (20) の用例は典型的な存在であるが、このように存在物が具体的な場所に存在する場合であっても、同様にyananで表わされる。

(20) Pangka wa fafaw yanan patash-an.
机 Lig 上 yanan 読む-LF
机の上に本がある。

ただし、サオ語にはyananのほかにも存在動詞ともいえるitia（～がある）があるが、itiaは単なるものの存在を表わす場合にのみ使用される。

(21) Itia sa nak a taun.
itia sa 1sG Lig 家
私の家がある。

以上の用例よりいえることは、サオ語ではどのような存在物であっても、存在場所がその存在物を所有することで存在につながるというとらえ方になることである。

(17)(18)の用例から、サオ族の世界においては、魚や獣などの生き物はそれぞれが自らの意志で存在するのではなく、自然という大きなわくぐみが魚や獣などの生き物を所有することで、魚や獣などの生き物は存在するととらえていると考えられる。

5．可能における表現の多様性

日本語の可能表現は、動作の実現（非実現）を含意する「実現系（アクチュアル）可能」と動作の実現（非実現）を含意しない「潜在系（ポテンシャル）可能」の二つに大きく分けられる。さらに「実現系可能」「潜在系可能」の下位分類として、渋谷（2002）では（ｉ）心情可能、（ii）能力可能、（iii）内的条件可能、（iv）外的条件可能、（ｖ）属性可能、（vi）外的強制条件可能（自発）に分けている。ここでは以上の分類のうち、（ｉ）から（ｖ）について調査した用例をとりあげて、ものごとの実現・非実現をもとに言語表現がなされるサオ語で、実現・非実現を含意しない潜在系可能がどのように表現されるのかについてみていく。

以下の用例は潜在系可能であるが、基本的な意味が「適した、十分だ」であるshdu、知識を表わすma-fazaq（知っている）とm-aura（知らない）、感情を表すsh-ung-kash（怖い）とm-ayaw（恥ずかしい）、よいか悪いかの評価を表わすma-qitan（よい）とma-qarman（わるい）などが動作を表わす動詞に先立って現れ、その動作をすることが「十分だ」「怖い」「恥ずかしい」「よい」「悪い」ことでその動作の可能・不可能を表わす。

（ｉ）心情可能

感情を表す動詞のsh-ung-kash（怖い）やm-ayaw（恥ずかしい）が動作動詞に共起すると、感情的にその動作をするのかしないのかということで心情可能を表わす。

(22) Ma-qulha-qulha wa hulus ifaz-ik m-ayaw.
Sta-Red-赤い Lig 服 着る-1sN AF-恥ずかしい
恥ずかしいので赤い服を着られない。（赤い服を着るのははずかしい）

(23) Yaku sh-ung-kash m-rauz antu shauna sa ma-rutaw a sazum.
1sN 怖い-AF AF-泳ぐ Neg ～まで sa Sta-深い Lig 水
深いところでは怖いので泳げない。(深いところで泳ぐのが怖い)

(ii) 能力可能

知識の有無を表す動詞ma-fazaq (知っている)、m-aura (知らない) が動作動詞に共起すると、その行為が可能か不可能かについて述べることができる。

(24) Yaku ma-fazaq ma-biskaw malalia.
1sN AF-知る Sta-速い 走る (AF)
私は速く走れる。(私は速く走ることを知っている)

(25) I-say makalh-turu-turu qamishan, ma-fazaq m-ifaz hulus.
Loc-そこ 六 歳 AF-知る AF-着る 服
六歳にもなれば、服を (一人で) 着ることができる。(服を着ることを知っている)

(26) Yaku m-aura m-rauz.
1sN AF-知らない AF-泳ぐ
私は泳げない。(私は泳ぎ方を知らない)

以下 (iii) (iv) (v) では、「適した、十分な」の意味であるshduが動作動詞に共起することで、その行為が可能か不可能かを述べている。

(iii) 内的条件可能

(27) Ma-qitan-iza shiz shdu m-ilu mu-tusi Lalu.
Sta-よい-alr 病気 shdu AF-泳ぐ MV-あちら ラルー島
病気が治ったので、ラルー島まで泳ぐことができる。

(iv) 外的条件可能

(28) Thuini itia shawan shdu mu-tusi Kariawan.
今日 ある 暇 shdu MV-あちら 埔里
今日は時間があるから埔里に行くことができる。

（ｖ）属性可能

(29) Haya wa bailu shdu kan-in.
この Lig 豆 shdu 食べる-PF
この豆は食べられる。

(30) Haya wa qalisqisan shdu kan-in Thaw mashtay ma-fazaq.
この Lig きのこ shdu 食べる-PF サオ族 みんな Sta-知る
このきのこが食べられることはサオ族みんなが知っている。

また、属性可能でも条件によって可能・不可能となる場合は、よい、悪いの評価を表わすma-qitan（よい）、ma-qarman（わるい）が動詞に共起することで、その行為がよい、悪いなどの評価から、その動作の可能・不可能を表わす。

(31) Faqlhu wa rusaw ma-qitan kan-in.
新しい Lig 魚 Sta-よい 食べる-PF
その魚は新しいので、食べることができる。

(32) Lhmir ma-sizaq ma-qarman ya qilha.
薬 Sta-苦い Sta-悪い もし 飲む（AF）
その薬は苦いので、飲むことができない。

しかし、以下の用例のように潜在系可能であっても、動作者の意志がその動作の実現を左右するというとらえ方をした場合には、シテ焦点形（Agent Focus）が直接使用され、その動作の実現・非実現に焦点がおかれた表現となる。つまり、その動作が実現するということはその動作ができることをも意味することになって、可能となるのである。

（ｉ）心情可能

(33) Ma-ra’in a shiqamish miaqay yaku m-rauz.
Sta-大きい Lig 波 いつも 1sN AF-泳ぐ
波が高い日でもいつも私は泳ぐことができる。

（ii）能力可能

(34) Nak a qumqum mi-mamuri m-ifaz hulus.
1sG Lig 孫 一人で AF-着る 服
私の孫は一人で服を着ることができる。

（ⅲ）内的条件可能

(35) Thuini matig-qaran mam-zai manash wa quyash ma-qa-quyash mani.
今日 Sta-嬉しい AF-言う たくさん Lig 歌 AF-RED-歌う また
今日は嬉しいからいくらでも歌うことができる。

（ⅳ）外的条件可能

(36) Wazaqan a sazum antu ma-tilaw, numa antu mu-tantu m-ilu.
湖 Lig 水 NEG Sta-きれい だから NEG MV-向こう AF-泳ぐ
その湖は汚れているから、泳ぐことができない。

6．おわりに

本稿では、サオ語の言語表現における文法的な特徴をみていくことで、言語表現に写し出されるサオ族のものやことのとらえ方についてみてきた。各節の用例を通していえることは、サオ語では実際にものやことを見て、知覚した上での発話が基本であるということである。たとえば、人のことを話題とする場合には、その人が話し手と聞き手の両者に共通に認識している人物であることが、発話のための必要条件である。また、ものごとを表現する場合は、現時点でそのものごとが実現しているかどうか、その動作が完了したかどうかという情報が必要である。

このことから、サオ語では「今、ここで」、つまり現場性にこだわって発話され、また、対象物を実際に見て知覚して発話すると同時に、できごとを知覚し実際の経験として話者に取り込まれた上で発話がおこなわれるといえるのではないだろうか。

【注】

サオ語の子音はp, b, m, f, t, d, n, th[θ], s, z[ð], lh[ɬ], l, r, sh[ʃ], k, ng[ŋ], q, h, y, w,’[glottal stop]で、母音は/a, u, i/の三つであるが、/i/は/q, r/と連続するとき[e]、/u/は/q,r,ng/と連続するとき[o]となる。/b, d/の前と、語頭･語尾の母音には喉門閉鎖音[ʔ](glottal stop)が現れるが、本稿ではその表記を省略している。ただし母音が連続する場合の喉門閉鎖音は「’」で表記してある。アクセントは基本的には後ろから二つ目の母音におかれ、その場合は本稿ではアクセント記号を省略しているが、最後の母音にアクセントがおかれる場合はá, í, úのようにアクセント記号を付与してある。

本稿では、文法的な注釈は以下のように略号で示す。

略号	文法的注釈
AF	Agent-focus
1s	First　person singular
alr	already
G	genitive
Irr	irrealis
LF	Locative-focus
Lig	ligature
Loc	locative
MV	Movement prefix
N	nominative
Neg	negative
O	oblique
p	plural
PF	Patient-focus
Prf	perfective
Pst	past
Red	reduplication
s	singular
Sta	stative

注

1　（民国106年４月數據）
https://www.apc.gov.tw/portal/docList.html?CID=AC58C79198E1FD34

2　（http://www.unesco.org/languages-atlas/index.php）

3　台湾名：石阿松　1923年生れ、2017年２月没

4　台湾名：袁嫦娥　1926年生れ

5　サオ語の言語調査は、Tarma氏（1948年生まれ、2016年没）、Ishul氏、Lujan氏（没）、Puni氏（療養中）、その他多数の方々に協力していただいたが、最も多く被調査者としてご協力を頂いたのがKilash氏である。

6　完了接辞の-in-は基本的には語中におかれるが、語頭や語尾におかれることもある。（in-、-in）

参考文献

渋谷勝巳（2002）「可能」『方言文法調査ガイドブック』大西拓一郎編・科学研究費基盤研究

新居田純野（2005）「存在動詞における「遠/近」「可視/不可視」――オーストロネシア語（サオ語）の場合――」『国文学解釈と鑑賞』1：164-173. 東京：至文堂.

新居田純野（2007）「サオ語におけるevidentiality（証拠性）とアスペクト」『大葉大学応用日語学報』1：136-155.

新居田純野（2007）「サオ語（台湾）における焦点接辞と二項述語階層」『他動性の通言語的研究』：66-78. 東京：くろしお出版.

新居田純野(2008)「日本語との対照におけるサオ語の時間表現――テンス･アスペクト――」『対照言語学研究』17：21-49.

新居田純野（2008）「サオ語（台湾）における現場指示表現――日本語との対照から――」学習院大学『人文』6：213-231.

新居田純野（2008）「日本語との対照におけるサオ語の可能表現」『大葉大学応用日語学報』2：197-223.

新居田純野（2015）「サオ語とブヌン語卡社群方言の存在・所有表現――日本語の存在・所有表現との対照から――」『台湾原住民研究』19号　風響社：75-102

Blust, Robert（2003）*Thao Dictionary*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Language and Linguistics Monograph Series No.A5.Taipei:Academia Sinica.

Li, Paul Jen-Kuei（李壬癸）（2011）*Thao Texts and Songs*. Taiwan: Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

【付記】本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）課題番号：17K02704、2017年度－2019年度、『台湾原住民語および東南アジア、東アジア諸言語における可能表現について』の助成を受けている研究に基づく。